

第二十八回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

勝又浩 著

わたくし
『私小説千年史 日記文学から近代文学まで』

(2015. 1. 30 勉誠出版 刊)

勝又 浩 文芸評論家、法政大学名誉教授

かつまた・ひろし 1938年(昭和13年)7月24日生まれ 77歳 神奈川県横浜市出身。

日本近代文学

1965年(昭和40年)、法政大学文学部日本文学科卒業。1969年(昭和44年)、法政大学文学部研究助手。1972年(昭和47年)、同大学院博士課程退学。以後日本工業大学講師、聖徳

学園短期大学専任講師、大正大学教授などを経て、1992年(平成4年)から2009年(平成21年)まで法政大学文学部教授。

1974年(昭和49年)、「我を求めて——中島敦による私小説論の試み」により第17回群像新人文芸賞評論部門受賞。2005年(平成17年)3月、『中島敦の遍歴』(筑摩書房)により、やまなし文学賞研究評論部門受賞。

著書に『作家論集 我を求めて』(1978年、講談社)、『求道と風狂』(1985年、構想社)、『都市の常民たち——作家のいる風景』(1994年、勉誠社)、『幸田文——新潮日本文学アルバム』(1995年、新潮社)、『引用する精神』(2003年、筑摩書房)、『中島敦の遍歴』(2004年、筑摩書房)、『作家たちの往還』(2005年、鳥影社)、『「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ——廃墟・占領・戦後文学』(2012年、白水社)。

受賞のことば

若いころ小林秀雄の影響から文芸評論というものを志してこれまでやってきた。しかし最近、自分の考えていることが何となく文芸とも批評とも逸れているようで、それが良いのか悪いのか迷うところもあった。そんなところへ今度の、私には思いがけない方角からの評価であった。ああ、これでもよかったのか、読んでくれる人もあったのだと大きな励みになった、なってゆくだろうという嬉しさが、いま湧き上がってきている。

今やりかけている仕事を終えたら、生涯のまとめとして道元「正法眼蔵」に取り組みたいと思っているが、気づいてみると、これも若いころずい分一所懸命読んだ和辻哲郎の仕事に繋がっていた。意識したことはなかったが、私小説というものを、広く日本の風土文化、言語の性格等のなかに置いて考えてみようとした今度の仕事も、その発想自体が和辻学びのなかからきていたのかもしれない。

有り難うございました。

《選考委員評》

梅原 猛

今回、選考委員の全員一致で勝又浩著『私小説千年史』が受賞作となった。勝又氏は長年同人誌評をしてきたが、すでに齢七十七、受賞歴はあるものの、強いていえば隠れた才能である。本作を受賞作に選んだわれわれ選考委員は、このような隠れた才能を広く世に知らしめることに期せずして多少なりとも役に立てたかもしれない。

この著には、これまで誰にも語られていない新説がある。それは、日本文学は、『かげろふ日記』などの日記文学に始まり、芭蕉の俳句に受け継がれ、結局、エッセーにすぎない『暗夜行路』などの志賀直哉の作品にいたる私小説の伝統をふまえたものだという説である。著者は、日本の近代小説を私小説としてコテンパンに批判する中村光夫の説をこてんこてんにやっつけ、久米正雄が語った『戦争と平和』や『ボヴァリー夫人』は通俗小説にすぎないという批評を採用する。また、さんざん通俗小説を書いた久米の文学の本領は俳句にあったという。

この千年にわたる私小説の伝統こそ日本文学の本道であり、私小説は文学的にも高い価値をもつと著者は論じ、そして、ベストセラー作家である村上春樹などの小説はまったくおもしろくないフィクションの世界であり、読むに堪えないと語る。

この大胆な文学論を私は高く評価するが、私が愛読してきた辻潤や牧野信一や小島信夫などの小説の解釈にも驚かされた。私は小島信夫と親交があったものの、その小説は理解できなかった。著者はその小島の小説を、波乱に満ちた自己の人生を同時進行で描いた稀有な小説として高く評価する。また、あの日中戦争に従軍した兵士のことを描いた伊藤桂一の小説に類い稀な倫理性をみたのは、著者が伊藤に劣らない人間的誠実さの持ち主であるからであろう。

この独創的な作品をできるだけ多くの文学を愛する人に読んでほしいと思う。

山折 哲雄

最近の芥川賞作品は、わずかな例を除いて、たいていの場合途中で投げだしてしまう。それは何故なのか長いあいだ思い惑っていたが、それはもしかすると私小説的契機がほとんど欠如しているからではないかと感ずるようになっていた。その積年の無念の嘆きを一気に晴らしてくれたのが、こんどの受賞作、勝又浩氏の『私小説千年史』だった。

日本の「私小説」は明治からはじまるとし、たとえば田山花袋の『蒲団』をとりあげてその卑小な心情表現を揶揄することがほとんど当り前のことになっていた。しかし本書は、それが西欧の近代文学を鏡とする自己倒錯の議論にすぎなかったことを日本語の重層的な構造分析を通して明らかにしている。

著者の見立ては、さきの田山の『蒲団』はじつは「竹中時雄日記」であるとするところからはじまるが、その底流ははるか平安時代にさかのぼり、『かげろふ日記』をはじめとする豊饒な日記文学に由来するという。さらにその「日記」を文学たらしめている根元に和歌の発生がひそむとして独自の論をすすめていく。和歌にはその後に発達する俳句とともにいわば主語が欠けている。西欧における「我」の意識が背景にしりぞき、それに変わって自然のような客体のなかにおのれを隠す「私」の世界が浮かび上っているからだ。それが千年に及ぶわが文学史の主流だったというわけである。

戦後、カミュの「異邦人」をめぐる論争で広津和郎を揶揄した中村光夫、俳句の存在意義をめぐっていち早く第二芸術論を発表した桑原武夫などがいかに見当はずれの議論をしていたかを遠慮会釈せず明解に指摘している。本書には写生やリズムの問題とともに「流動する一人称」といった魅力ある文章も収められ、変幻自在な日本語の奥座敷につれていく。著者は長期にわたり「文学界」などで同人雑誌の批評をつづけていたという。その地道な仕事が、こんどの作品に気品のある実りをもたらしたのであろう。

阿刀田 高

たくさんの I と私小説

昭和 20 年代から 30 年代にかけて、私の若いころには桑原武夫の『文学入門』が広く読まれていた。ゾラ、フローベール、ゲーテ、トルストイ etc、社会と人間をストーリー性豊かに描く欧米の文学こそが本道であり、日本の伝統的な私小説は低く扱われているように（余人はいざ知らず）私はそう読んでしまった。この影響は、私のメンタリティに少なからず残っているように思う。しかし、50 歳を過ぎるころから、日本文学の中に顕著に存在し続けて、読者に十分な感動を与える私小説について、

—これは独自のジャンルだな—

ぼんやりと感じ、明らかに評価が変わった。

熟慮したわけではなかったが、このたび勝又浩さんの『私小説千年史』に遭遇して、

—そうであったか—

と眼から鱗の落ちる感動を味わった。

日記文学の誕生から書き起こし、随筆、和歌、俳句、これらへの長い愛好がどう私小説を育み、国民的な文学を創りあげたか、分析は鋭く、納得がいく。とりわけ、日本語では英語の "I" で表される自称語が、我、己、み、それがし、おれ、わちき、小生 etc、百を越えて用いられていること、つまり状況によりいろいろな自称があつて、"時、所、相手に応じて、その関係性のなかで選ばれ、使い分けられている" ことを指摘し、それゆえに日本語こそが "私" を固定せず、周囲に多彩に対応する私小説を誕生させ、長く愛されるものとした、と説くくだりには膝を打った。

伊藤桂一、志賀直哉、辻潤、牧野信一、小島信夫の文学の分析にも蒙を啓かれるところが多くあった。

私小説は、よくもわるくもあい変わらず書きつがれ、広く読まれているが、ユニークな視点で説かれた、この文学論は高く評価されてよいものと思った。